

10 代で母親になること—ライフコースからの「逸脱」とアイデンティティの形成

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

10 代で母親になることに対しては様々な問題が指摘されており、社会の規定する 10 代としての地位を違反している 10 代母親は、逸脱者としてとらえられがちである。本研究では、10 代母親を取り巻く社会環境を明らかにし、また 10 代で出産した母親へのインタビューを通してその存在を直視することにより、10 代母親という「問題」を再構成した。

10 代母親を取り巻く社会環境として、日本は先進国の中できわめて 10 代出産が少ない国である。言説分析では、10 代妊娠の多くは「望まない妊娠」と解釈され、10 代で出産することのリスクを主に取り上げ、いかにサポートするかといった展開で論じられていた。

インタビュー分析の結果、10 代母親は自ら望んで出産を決意し、妊娠・出産を通して自分を見つめ直し、子どもをもつ事で長期的な視野を持つことが可能になっていた。また、「自立したい」等の理由で計画的に妊娠している母親が存在することから、10 代の出産は避妊の失敗であるとは言えない。10 代母親を生む背景には独特の環境や文化があり、彼女たちにとって 10 代で出産することは決して特別なことではない。また重要なのは、10 代女性が子どもを生むことに自らのアイデンティティの確立を求めているという点である。10 代の母親たちが「生きがい」を子どもに求めるのは、自らの人生を十分に生きられていないからではないか。10 代の出産はこれらの社会的要因に大きく影響を受けているにも関わらず、10 代母親のみを逸脱者としてとらえる社会の現状がある。

以上の結果から社会の課題として、10 代の母親たちの生きる文化を理解し尊重すること、10 代の母親に対する子育て支援、妊娠・出産する生徒に対する学業継続の保障、また出産を希望する生徒に対しより具体的に子育ての実態を教えていくことがあげられた。